

ネパールの農村における女子学生の幸福度の要因分析

—生理の制限に着目して—

栗田匡相（関西学院大学）

棚橋愛梨咲（関西学院大学）

Kurita, Kyosuke (Kwansei Gakuin University)

Tanahashi, Arisa (Kwansei Gakuin University)

ネパールでは、月経に対する行動制限が今なお根強く残っている。「チャウパディ」(Chhaupadi) と呼ばれているこの風習は、月経は「不浄」であり、月経中の女性が家族と同じ部屋で過ごすこととあらゆる災いをもたらすと考えられており、生理中は、生理小屋などに1人で過ごさなければならないとされていた。生理小屋は、家から離れたところにあたり家畜小屋であったりする。そのため、不衛生な環境、寒さ、性的暴行、栄養不足、野生動物などによって女性が隔離中に心身の健康を害したり、実際に命を失ったりする事故が相次ぎ、問題となっていた。そこで、チャウパディは2005年にネパール最高裁によって違法とされた。しかし、依然としてチャウパディの慣習は農村地域などでは現在でも残っている。そこで本稿では、2023年3月にネパールのシンドウパルチョーク群にある農村を訪問し、生理による行動制限を受けるネパール農村地域の女子学生の幸福度の要因分析を行った。分析の結果からは、チャウパディを経験したことのある女子学生も15%程度存在していた。チャウパディのような慣習が引き起こす生理による行動制限が女子学生の幸福度に負の相関があることが分かった。また、性格特性である協調性、学校の楽しさなどが幸福度に正の相関があることなども分かった。